

苗代管理二
苗代日數
8 農試本場 丁技師

ところが實際は苗の成育に適法を得るならば六月中旬の田植えと上旬の田植えとは其所に大した差を認めるものはない。

當場に於ては茲數年來七月五日植の試験をしてゐるが播種期、播種量植付方法等の種々の組合せにより相當の徑庭を見出すのであつて特に著しいものは播種量の多少による晚植の結果である、左に昭和九年の成績を掲げて見れば四月二十日播の場合(移植期七月五日、五十六株五本植品種愛國二號)

種量	出穗	熟期	反常立	米收量
○、五合	八三	一〇三	三石〇匁	
三、〇合	六八	一二二	二石九匁	
六、〇合	六〇	稍完熟	一石九匁	

四月三十日播の場合

種量	出穗	熟期	反常立	米收量
○、五合	八三	一〇三	三石〇匁	
三、〇合	六八	一二二	二石九匁	
六、〇合	六二	稍完熟	一石九匁	

右の裏合標準六月四日植の成績は出穂期八月二十七日成熟期十月十七日收量三石成績期十月十九日である。

即ち七月五日植でも一坪に対する○、五合播きの遮播きにすれば普通三合播き六月四日植えの成績に對比して大なる劣差を見ないのである、故に六月中に田植えの出來得る様な二毛作の關係ならば一般毛作の栽培の沈退することがあるが如き懸念はないのである、凶作防止の早播き早植えと云ふなりもの入りの獎勵があるからと云ふので二毛作の栽培の沈退することがあれば筆者は最も遺憾とするところである。(終り)